初出一覧（略号は、前項の引用文献に対応）

序章　安溪遊地、二〇〇二aを改変。
第一章　宮本常一、一九七二。
第二章　安溪遊地、一九九一を改変。
第三章　安溪遊地、一九九二cを改変。
第四章　安溪遊地、二〇〇六bを改変。
第五章　安溪遊地・安溪貴子、二〇〇〇と、安溪遊地、一九九五aから抜粋・改変。
第六章　安溪遊地、一九九三bを改変。
第七章　安溪遊地、一九九二bを改変。
第八章　宮本常一、一九七六から抜粋。
第九章　安溪遊地、二〇一七から抜粋。
第一〇章　安溪遊地、二〇一〇を改変。

詐欺師に会う／詐欺師になる　9，74-75
親戚扱いを受ける　77，131
エコツアー／エコツーリズム　11，61，85
リゾート開発に異論を唱える　55，86
援助にともなう諸問題　71，82，84，111
個人プレーで解決できる／できない　84，108，110
地域での微妙な問題　24，106
差別という問題　6，55，101，108-109，111，123

［アフリカでそこまでやるの？］

アフリカは身近な世界　114，117-118
初対面の親切を受ける　115，117，129
言葉を事前に学ぶ／フィールドで学ぶ　114，121，130，142
歌をうたう　115，123
使用人を雇う／雇わない　135
法外な値段と戦う　130
撮影と録音をしない　130
フィールドで叱られる　124，134-135
村で養子になる　82，122，131
裁判の原告になる　134，143
忌避関係／冗談関係に入る　132-135
恥とねたみ　135，137
父を生む　137
村おこしに乗り出す　83，141
神話を聞く／語る　138
ことわざの力にたよる　142-143
寓話を即興で語る　142-143
日系アフリカ人として生きる　143

［フィールド・ワークの未来へ］

研究倫理（モラル）　2，69，104，123
取材者へのコードをつくる　79
地域への愛と学問研究のバランス　1，60
失敗を語る教育プログラムを　61
話者が筆をとる試み　67-71，104-105
地域の研究仲間を励ます　48
地域の「こころ」をもつ研究者を　105
学会の連合　14，17，27，106-107
保護／保全と研究者の役割　10-11，32，54，85
学問のあり方を問う　19，41，45，47，49，51，54，86，101，109，120，123-126
野外諸科学の再生への道　37，100，111

本書でフィールドでの指針のひとつとして描かれている人たち

ある島の女性Ｐ子さん　50，93
石垣金星　62-63，123
伊谷純一郎　6，61，76，120，128
伊波普猷　129
掛谷誠・英子　129
萱野茂　56
川喜田二郎　6，76，128
國分直一　72，76，120
コンゴのホテルの給仕　108，123
笹森儀助　70
渋沢敬三　8，14，106
田代安定　8
玉野井芳郎　120
津野幸人　85
仲松弥秀　73
野口武徳　66，104
宮本常一　1，5-7，9-11，13，36，76，100，106，110，120，129
山田武男　68-69

フィールドでの指針としての事項索引

［フィールドに出る前に考えること］
研究者の卵として　1，61，121
渋沢敬三氏の３つの教え　14
調査される立場を考える　17，22，101，104
調査地被害　1，7，13，35-37，67，100，110
紋切型の調査の例　20
偏見理論の例　21
調査は中央の力を強める　6，34，100
調査費の問題　11，28-29，72，121
調査の依頼と調査許可　28，39

［フィールドで気をつけること］
フィールドでは模範解答がない　66
盗むなかれ　31-33，42，54，57，73，87，91
非常識な大学教員の例　31，37-38，54
非常識な取材陣の例　78
調査してやるという意識の例　28
訊問科学／訊問調査の例　15，19，69
住民の暮しを大切に　46
人としての心をもって　39-41，45-50，60，66，70，108-111
話し手が心の準備をする余裕を　44，85
方言が通じる／通じない　91-92
そもそも訊けないこと　138
仲間だと思われればいい　11，19，110
神職の方への接し方　45
しったかぶりの語り部に出会ったら　49
酒を飲む／飲まない　64，66，139-140
フィールドで叱られる　6，36，51，53-54，78，123
ウソつきと言われる　16，44
喧嘩する／しない　41
命の危険を感じたら　63-64，130
フィールドを去る日に初めてわかること　134-135

［調査以外のことをする／しない］
フィールドでの濃い／淡いかかわり　59-61，77，86
雑談ができるようになる　69
第二のふるさとと思う　10-11，55，69，76，108，143
地域社会の崩壊に直面する　83，109，139，143
地域の人と痛みを共有する　36，50，74，110
ボランティア活動にかかわる　8，71，82
種をまくのは簡単だが　86-87
発言したことには責任が伴う　73，141
地域と一体となって活動する　69，111，140
芸能の大切さ　21，49，79-81，105
祭の裏方をまかされる　78
フィールドで無力感を感じる時　83，107-108

［成果の発表と地元への還元］
まず礼状を書く　94，102
報告書を書く／書かない　8，40，46-47，49，101-104，107
報告を何語で書くか　101
プライバシーをどう守るか　36，56，71
匿名が必要な場合　51，55
地元に無断で公開しない　42，81，94
地元の人に添削してもらう　66，93，104
書くことが許されない場合　94，108
肖像権を守る　78
著作権をめぐる問題　2，71
テレビ局のやらせの例　2，38，97
研究成果の還元を考える　99-100，104，106-107，111
調査結果が地域のお手本に？　78，107
地域を批判する／しない　29
出版経費の問題　69，105

［たくさんの落とし穴］
フィールド・ワークの落とし穴　59-61，70
一線を踏み越える／越えない　76，83，141
運動に係わる　6，60，62-63，86
ヤマネコ印西表安心米を売る　8-9，11，16-17，47，55，72-77，84-86，141

【著者】

宮本常一（みやもと・つねいち）

1907年山口県周防大島生れ。16歳の時に大阪に出て逓信講習所で学び、天王寺師範学校を卒業後、小学校教師となるも病を得て帰郷。療養中に柳田國男の『旅と伝説』を手にしたことがきっかけで、柳田、渋沢敬三という生涯の師と出会う。39年に渋沢の主宰するアチック・ミューゼアムの所員となり、57歳で武蔵野美術大学に奉職するまで在野の民俗学者として日本全国を歩く。66年日本観光文化研究所を設立し、後進の育成に努めた。著書に『忘れられた日本人』『宮本常一著作集』（未來社）、『日本文化の形成』（そしえて）、『宮本常一離島論集』『宮本常一写真図録』『宮本常一の風景をあるく』（みずのわ出版）など。1981年没。宮本が遺した膨大なフィールド・ノートや写真等の資料は、宮本常一記念館（周防大島文化交流センター）に収蔵されている。

安渓遊地（あんけい・ゆうじ）

1951年富山県射水郡大門町生れ。京都大学理学部学生の時、川喜田二郎氏の移動大学運動にふれてフィールド・ワークを志す。伊谷純一郎氏の指導で、西表島および熱帯アフリカの人と自然の研究。人類学専攻。沖縄大学、山口大学、山口県立大学を経て、山口市北部の「阿東つばめ農園」で営農ソーラーのある無農薬家族農業を実践中。共編著書に、『廃村続出の時代を生きる――南の島じまからの視点』（南方新社、2017年）、『奄美沖縄環境史資料集成』（南方新社、2011年）、『奇跡の海――瀬戸内海・上関の生物多様性』（南方新社、2010年）、『西表島の農耕文化――海上の道の発見』（法政大学出版局、2007年）、『続やまぐちは日本一――女たちの挑戦』（弦書房、2006年）、『遠い空――國分直一　人と学問』（海鳥社、2006年）など。

ブログ https://ankei.jp では、研究成果の地域との共有の試みとして、ソンゴーラ人、西表島、与那国島の３つの生物文化遺産データベースを公開中。スマホからは以下のQRコードで。

【編集にあたって】

- 第１章「調査地被害――される側のさまざまな迷惑」は、『朝日講座・探検と冒険』（朝日新聞社、1972年）が初出である。本書では、『旅にまなぶ　宮本常一著作集第31巻』（未來社、1986年）を定本とした。
- 第８章「宮本常一・はじめてのアフリカ」は、『あるくみるきく』昭和51年１月号（日本観光文化研究所）に掲載された「東アフリカをあるく」（「宮本常一、アジアとアフリカを歩く」岩波現代文庫、2001年に収録）から抜粋したものである。
- 各章扉の写真は、第１章（山口県旧久賀町提供）と第８章（伊藤幸司撮影）を除き、安渓遊地撮影による。